

2012年 5月16日

羅針盤セミナーパートII

會澤祥弘講演録

### ■演題 「流転」〜ニッポン幻視考〜

#### ●イントロダクション

西高生の皆さん、こんにちは。西高34期の會澤と申します。今日はこのようなところに呼ばれて感慨無量です。30年ぶりに母校に足を踏み入れて、高校のときと自分は何も変わっていないと、改めて思います。西高の時、私は社会に対し斜に構え、こまっしゃくっていたのを覚えています。皆さんもたぶんそうなのだろうと思います(笑)。そういうこまっしゃくくれた西高生に、何をお伝えすればいいのかと、自問しているところです。

今日は「流転」という題で話をします。日本経済新聞社のニューヨーク特派員をやった後、今はコンクリート屋さんをやっていて、なんだ、このおっさんは、と思っている方も多いと思います。若干今の私の仕事の話をします。

アイザワという会社、札幌市内にもいくつか工場がありますので、赤い文字のカタカナの看板を見たという方もいらっしゃると思います。コンクリート事業をやっています。皆さんの身近な話で言いますと、例えば札幌駅、今は「サツエキ」と言うそうですけれども、JRタワー、ステラプレイスには弊社のコンクリートが全量使われています。北海道で最高層のビル建築になります。あるいは、札幌ドーム。最近では帯広に抜けるトンネルだらけの道道道。2011年11月に全線開通しましたが、ほぼ全てのコンクリートを供給しました。

生活に密着している住宅産業についても手掛けています。工場で住宅の基礎に使用するコンクリートパネルを製作し、現場に持ち込んで、瞬時にジョイントし、1・2日で住宅の基礎を組み立てる。従前であれば、生コンをコンクリートミキサー車で現場に運び、現場組みの型枠に生コンを投入するというやり方でした。これから日本は高齢化社会を迎えて、労働人口が減少していく時代です。なかなか労働者を確保できなくなる時代が来るため、限られた人数で住宅の基礎工事をできるシステムを開発したのです。

日本は先進国になって久しく、成熟した社会になりました。成長の時代は終わり、コンクリートの需要はどんどん減っています。一方海外に目を転じたら、大変な開発ラッシュが興っています。例えば、2009年には、ベトナム・ホーチミンシティのサイゴン川海底トンネル建設プロジェクトに参画しました。一函2万5千トンという巨大なボックス構造のコンクリートを4函製作し、それを川底に沈めて連結し、地下トンネルをつくるというものです。腐食土ばかりで、まともにトンネル掘削ができない川底に巨大なトンネルを通す日本の最先端工法で、大手セネコンからボックスの製造を受託しました。写真で見てもうれば分かると思いますが、こんな巨大なボックスは到底陸送できないので、川の傍に仮設のドックをつくって製作し、後で堤を決壊させて浮力で浮かせ、船で曳航して現場に運ぶのです。

この写真は2012年4月に完了した橋梁工事。ロシアのウラジオストックに、ゴールデン・ホーン・ベイ(金角湾)があります。そこに全長で約2キロ、東京のレインボーブリッジより長い橋の工事をロシアがプーチン政権の肝煎りで行いました。日本の冬期コンクリート特殊技術をどうしても使いたいという要請を受けて、ロシアの国家プロジェクトへの参画を約3年前に決めました。イタリア製の製造設備を橋梁の建設現場に持ち込み、日本人とロシア人の混成チームをつくってこの春、工事をほぼ完了させました。高さ260メートルを超えるV字型の美しい橋脚です。今年の9月にAPEC(アジア太平洋経済協力会議)、つまり世界の先進国ならびに新興国の元首とアジア太平洋の元首が集まる会議が、ウラジオストックで開催されます。日本からも、野田総理が出席する予定です。その時に、この新設した橋が恐らくは目にとまるはずですよ。

ロシアは本来ヨーロッパの国ですけども、今世界経済の中心がアジアに移りました。アジアに向けて開かれたウラジオストックの港に、集中的にロシア政府は資金を投資してインフラの整備をしている。そこに対し我々はビジネスチャンスがあると判断して進出を決めたのです。

モンゴルにも進出し、2012年5月から本格的に事業を開始しました。私の体を見て、モンゴル相撲でもやりに行つたのかと、からかわないでくださいよ(笑)。ウランバートルに会社を作つたのも、マイナス40度になるような極限環境のなかでコンクリートを製造する技術を確立し、モンゴルのインフラの整備に対し、貢献しようと考えたからです。

経営者が経営に関して講演をする機会があります。私は経営は語るものではなく、実践するものだと自戒しているので、今日はこのような話をするのが目的ではありません。演台に立った人間が今どのような仕事に携わっているか、触りとしてお話ししたつもりです。

#### ●西高時代に先生の教えが人生の転機になった

ここから西高時代の話をします。私は札幌市民ではありませんでした。新ひだか町(旧静内町)で生まれ、学区を飛び越えて学校に入る場合は、5%枠がありました。全体の人数の5%しか外部から入学を認めなかった。けれども田舎の子供たちは、良い学校に入りたいので、そこを狙うのです。高校受験に際し、西高以外の選択肢は私にはありませんでした。西高といえば自由・自律。いわゆる受験校である南高や北高とも違うしどの高校とも違う、ある意味自由で闊達な校風が轟いていました。それに強く憧れて西高の門を叩いたのです。

高校にオーケストラがあることに驚き、ハレルヤのオーケストラの音色、入学式の感動を今でも覚えています。丁度この体育館の裏の6畳一間の下宿に入りました。風呂もない、いつも西高の前の道路をテクテク歩きながら、道路を越えて少し行つたところに、今あるのかどうかわかりませんが、ラドン温泉という銭湯がありました。風呂の道具を毎日持つていくのが面倒で、風呂屋のおばさんが『會澤くん、置いておいても、いいよ』と言ってくれました。冬の寒い日、風呂上がりの頭はいつもバリバリにしばれました。そんな下宿生活を思い出します。

決して優秀な学生だつたわけではありません。しかし、素晴らしい先生と、才能豊かな同期の連中に恵まれました。今日私がこの演壇に立つているのも、2年ほど前に東京駅の新幹線のホームで、ぼつたり、これからドリームプロジェクトのプレゼンテーションを行う笠間君と出会うたからです。『おお、會

澤！』誰かなと思うと、笠間君でした。そこから私と西高の関係が復活をして、縁あって、今日このように大役を務めているのです。皆さん、自分の横にいる人間、後ろにいる人間、多くの同期がこれから社会に巣立って行って、素晴らしい人間になっていきます。今でこそ、周りにいる人を、なんだ、こいつ位に思っている人が多いと思います。西高生はそれなりの素養を持って西高生になっているから、社会に出て一歩踏み出すと、気がついたら同期の連中が素晴らしい職業に就き、社会の第一線で活躍している時が必ず来ます。是非友達は大切にすると同時に、学校の先生の教えを真摯に受け止めてください。

私は西高時代、学校の勉強よりも読書に夢中になりました。大きな影響を受けた先生が1人いらっしゃいます。倫理社会の先生で奥村先生です。背が高く威厳に満ちた方でした。西高でいろいろな授業を受けて、倫理社会という小さい世界になります。先生が教えてくれたのは、人間の哲学、世の中を構成しているものの捕まえ方、そして社会の在り方。高校生に接するというより、大人に接するようについてくださったのを、今でも覚えています。奥村先生から受けた西洋哲学の講義が私のひとつの転機になって、その後高校時代は哲学書、宗教思想、文学書などを濫読するようになりました。気がついたら数学が嫌い、物理もダメ、ということから、しょうがなく2年生に理系から文系に転換したのです。

とにかく読書の量では負けないという自負もあり、東京の某W大学の第一文学部に行く予定だったのですが、なにをどう間違ったのか(笑)、合格発表に私の番号はなく、浪人することもままならんと親父に言われた経緯もあり、滑り止めで受けた中央大学に入って大学生活を始めました。

#### ●大学時代、海外を40カ国放浪の旅に出る

私が大学時代に一番やったこと、それは「旅」です。男伊達らに大学でフランス文学を専攻したこともあり、現実の世俗的な社会と接点のない世界、とくにビジネスの世界とはおよそ関係のない世界でひっそりと過ごしたい、また自分の考えの越くままに思索家として過ごしたいという想いが強くありました。出来ることならば、大学に残って研究生活をやりたいと思っていました。

そのような傍ら、当時、大学に入ってからやったことは、とにかく外に出る。外というのは海外です。当時の私にとってフランスは理屈抜きの憧れだったので、とにかくフランスに行ってみたいと思いました。30年前はようやく格安の航空券が世に登場して、当時のレートでパリまで往復10万円くらいしました。航空券をアルバイトして買い、お金を貯めて、大学の夏と冬の休みに、大学の休みは長いので前後を入れて大体2カ月間くらい、毎年のように海外に行きました。

当時は、今ではもう流行らないかもしれませんが、バックパッカーというザックを背負って世界中の大学生が貧乏旅行をするということが一種の流行でした。アメリカから来た大学生と同じホテルで宿泊するなどの経験をして、大学を卒業するまでの間、都合40カ国を渡り歩きました。

お金をかけないで旅することはできるものです。イギリスのトーマス・クックの時刻表を買って、ユーレイル・ユースパスという、学生がヨーロッパ中のどの電車に乗ってもお金がかからない、というパスを持って、毎日あてどのない何の計画もない旅をずっと続けていました。

いろいろな国を見ました。ヨーロッパから始まって、その後はアフリカに興味を持って、モロッコからアルジェリア、この間政権交代があったチュニジア、リビア、エジプト、それから中東のシリア、ヨルダン、イス

ラエルなどを回りました。それからインド。卒業の最後の旅は改革解放が始まったばかりの中国でした。上海の安ホテルの屋根裏部屋みたいな部屋を借りて、1988年に1カ月間くらい滞在し、通りという通りをくまなく歩きました。当時の中国は貧しく、何もかもが絶望的にうまく行っておらず、当時、私は「この国はおそらく100年経っても日本には追いつけないだろう」と確信しました。結局、それは全くの錯覚だったのですが、当時はそんなことを感じるほど、中国は交通機関からサービス、衛生状態までひどく遅れていたのです。

本当は大学に残ってフランス系言語学の研究をやり続けたいと思っていましたが、残念ながら現実問題として、生活が出来ないことが分かりました。助教教授連中の生活を聞かせてもらっても、なかなか理想どおりにはならないと。時あたかもバブルの時代です。皆さんバブルの時代というときよく分からないかもしれないけれども、日本が戦後のキャッチアップの時代から経済成長してピークにあった時代です。社会的に皆浮かれていたし、経済的な成功が唯一の価値観である、という時代だった気がします。

そこで、就職という現実には直面します。私が一番びっくりしたのは、就職には差別があるということでした。学部差別です。今でこそ学部差別はなくなりましたが、当時文学部出の男子学生など、企業の採用の対象外だったのです。このままだったら就職できないと考えて、学部指定がないところを探しました。唯一と言って良いかもしれませんが、メディア、新聞社には学部指定がなかったのです。試験の一発勝負で、就職ができることが分かって、就職するのであれば、活字メディアである新聞社しかないと思います、当時時代も時代でしたので、経済専門紙の日本経済新聞社に就職することを決めました。

就職のために特別に何かをやったわけではありませんが、4年生になってから一年間、とにかくひとつのことだけはやり続けました。それは新聞を毎日1字たりとも逃さずに全部読むことです。

凡事徹底という言葉があります。ひとつの凡庸なことをずっとやり続ける。新聞の記事はもちろん、雑誌や商品の広告まで新聞に掲載されている文字はすべて追い続けました。毎日同じことをやり続けると、昨日との違い、1週間前との違い、世の中のうねりが良く分かってきます。そのお陰で、難関といわれた日本経済新聞の試験は正直、易しく感じました。

日経の同期入社は約50人いたのですが、実際に全国から受けた人数は5千人内外と言われ、大変狭き門でした。別に自慢するわけではありませんが、とにかく何かひとつのことをやり続ける、凡事を徹底すると、きつかけをつかめ、ブレイクスルーする力になると思います。

#### ●流通業の経済記者として出発

新聞記者の仕事はどのようなものか皆さん想像がつかないでしょう。夜非常に遅い仕事です。役所、企業、業界団体の記者クラブに配属をされて、朝は大体10時くらいから、昼間の取材は記者会見という形でやるので、どの社も同じ取材先からの情報を受けます。記者会見で訊く話というのは、結局活字に落とした時には同じニュースにしかならない。それでは新聞社としての競争になりませんので、どこかで差をつける。いつやるのかというとき夜やるのです。「夜討ち朝駆け」といって、取材先に対して徹底的に、仕事が終わった後に自宅まで乗り込んで行って、取材をします。他社の裏をかくなど、必要に応じて朝ご自宅の前まで行き、箱乗りと称して取材先の社長車にすげずけと乗り込み、取材を続ける

こともあります。入社した時は、流通経済部に配属され、流通業界を担当しました。当時、ダイエーという会社が業界のトップとして君臨し、中内功さんという戦後の特筆すべきカリスマ経営者がそのグループを牽引していました。一代で5兆円の企業グループを創り上げた中内氏のメイン担当に若くして抜擢されたときの興奮を今でも覚えています。田園調布の博物館のような大きな屋敷にほぼ毎日乗り込み、中内功という男を徹底的にマークしました。

新聞記者の仕事は派手なようであり、地味な作業が多いのです。先ほど凡事徹底と話しましたが、毎日取材先に対してアプローチし、ちょうどした相手のニュアンスの変化、ちょっとした考え方の変化を、取材ノートに克明に記載をしていく。その変化を追いかけていくのです。関係する情報の裏を別の例えで金融機関の筋から取ることや、中内さんが日ごろ懇意にしている業界の関係者から話を取るなど、複合的な取材をしながら、ある時にこうだ、間違いないと確信した時に、特ダネが書けるのです。『中内さん、これから輪転機を廻します』と最後の確認作業をして、相手が否定をしなければ、つまりノートメントならば、それがオーケーという暗黙のサインです。日経という新聞社は論功行賞がはつきりしていました。特ダネをいっぱい書いた記者は、行きたいところに行かせてくれるのです。1994年から98年の4年半、ニューヨークに行つて、取材をすることになりました。

#### ●国連を取材したニューヨーク特派員時代

今日は折角の機会なので、ニューヨーク特派員時代、私の直接のメインの担当だったUN(国連)について少しお話しします。United Nations は日本では国際連合や国連と訳しますが、本当は直訳としてはおかしいと思いませんか。国際連合だったらInternationalなんとかになるのだけれども、United Nations を日本では国連と言っています。あたかも日本人が国連という言葉を知ったときに、崇高な世界政府があるというイメージを持つ人が多いのですが、実際は「連合」と訳さなくてはならない。国連憲章は、We the peoples of the united nations determined(我々連合国の人民は)で始まります。連合国の人民はどうこうするという文章が書いてあって、当然日本は枢軸国でしたから連合国ではなく、戦時中の連合国という枠組みがそのまま生きている世界、それが国連なのです。是非皆さんに理解してもらいたいのは、国連が日本では国連中心外交だと言って、崇高な政府であるかのように錯覚しているのですが、現実にはいろいろな国の外交の利害関係、バトルをやる場、パワーゲームの場だということです。飽くまで、パワーゲームで国際的な世論誘導をする場です。

国連には2つの機関があります。国連総会は193カ国の全加盟国が加入し、1国1票でいろいろな採決をするところ。もうひとつは安全保障理事会。安保理とよく言いますが、この組織体があります。私は4年間の取材の中で大概の時間にこの安全保障理事会の取材をしていました。皆さんも社会科の勉強でご存知かもしれませんが、米英仏露中、第二次世界大戦で戦勝国側になった国がパーマネント・ファイブ(P5)と言われる常任理事国で、この国が拒否権を持っている。その他に非常任理事国が10カ国持ち回りで2年間選ばれます。この機関が世界中を法的に拘束できる、決めたことを守るように加盟国に対して言える、そういう決議を採択できる極めて強力な権限を持った機関です。この安保理の決議は、国際社会で紛争が起きたときに、どういふメッセージを国際社会として決めたのかということの証明になる。決議の文言の中にどのようなメッセージを外交として送り込むか、ということ

やる世界です。安保理には、法的に加盟国を拘束できる「決議」と、公式文書ですが拘束力はない「議長声明」。そして必要に応じて時の安保理議長が出す非公式の「プレス声明」の3つがあります。

例えば、身近な話では、4月13日に北朝鮮がミサイルを公海上に向けて発射する重大な事件がありました。日本政府やその他の関係する国も、安保理の開催を要求しました。今般の経緯は、すぐに北朝鮮の行動に対して、非難をしなければならない、国際社会は、徹底的に非難をしているというメッセージを送らなければならない。安保理の決議は、採択までに非常に時間がかかります。全加盟国を法的に拘束するだけに紛争の当事国と関係の深い国にまで綿密な調整を進めなくてはならない。早い段階で国際社会の意思を打ち出すとすれば議長声明という形が現実的であり、日本政府としては今回、決議より劣るのを覚悟で議長声明という方法を選択しました。北朝鮮の行為を直ちに非難することを優先したのです。

実際の文言は、Security Council strongly condemn(安保理は強く非難をする)。これは世界にいろいろな紛争が起きますが、その国にstrongly condemn という言葉を使って罵る、全くもって100%の罪は君にあるよ、という表現の中では最も強いもので、日本政府も頑張ったと思います。今は便利な時代になりました。インターネットを開いたら、国連の安全保障理事会でなされた決議が自在に閲覧することができます。是非見てください。

安保理の決議は、皆さんもテレビでよく見る馬蹄形の円卓の専用会議場で採択されます。ここで国連外交官が議論しているように思われますが、実はこの議場、単純に決議や声明を採決するためだけのセレモニーの場なのです。実際の外交協議は馬蹄形の部屋のすぐ隣にある、秘密の小部屋、「コンサルテーションルーム」で行われます。これが94年に私が取材していた当時、初めて公開されたコンサルテーションルーム内部を撮った貴重な写真です。外交の真のバトルはプレスにも非公開であり、それを地道な取材によって何が起きているのかを追いつけるのです。

安保理は、ある国に紛争が起きて止めるために、どのような文言でメッセージを盛り込み、その国を非難するかを協議し、理論上は最悪、国連軍を組織することもありえます。そのように世界で安全保障上の問題、由々しき問題が起こったときに、すぐさま活動をする組織体なのです。ただ毎日北朝鮮のミサイル発射事件のような事故が起こるわけではないので、平時は暇です。しかも外交の場合は文書がどういふ変化をしているかを追いかけていく非常に地味な作業です。私は元々経済記者だったものから、安保理取材の傍ら、アメリカでも経済の取材をずっと続けました。

この写真は、ご存知かどうか分かりませんが、シエラ・ベズスというアマゾン・ドット・コムを創業した経営者です。95年7月の写真です。アマゾン・ドット・コムという会社を日本で初めて紹介したのは私です。別に自慢しているわけではありません。想像できないかもしれませんが、昔は世界がネットであつていなかったのです。ようやくウィンドウズ95というソフトウェアが世の中に広がって、ネットスケープのブラウザがネット上で販売・流通されるというネットの草創期でした。ベズスという男は、元々東部で証券アナリストをやっていました。シアトルに行きインターネットのeコマースに一番適しているのは本だと。検索性とか書評を読者に書いてもらってデータベースがどんどん自己増殖していく仕組み、本とインターネットのそうした相性にいち早く気付き、アマゾン・ドット・コムという会社を興したのです。

私はそのうわさを聞きつけて、ニューヨークからわざわざシアトルまで取材に行きました。行ったのは

いいんですけど、とても小さい部屋で。パソコンもぼつんと1台あって、今では考えられないCRTの大きなブラウン管でした。これでは撮影しても絵にならないから何とかならないか、という話をしたら、彼が塗料のラッカーで amazon.com と吹き付けて写真用に即席の看板を作ってくれたのです。今では大企業になってしまい、この写真も超レアものです。ひとつの産業、ひとつの歴史の転換点を切り取って歴史を刻んでいく作業が記者の仕事といえます。

●世界との関わりが日本人としての大切さを教えてくれた

高校時代、大学時代の話をしたように、世界との関わりを持って、実際にニューヨークに行き国連の外交や世界を感じ、今度は事業をやるために北海道に戻ってきた。アマゾン・ドット・コムのようにインターネット産業がどんどん勃興している中、新聞記者の仕事に見切りを付けたというわけではありません。本当は体が2つあったら、今でもやりたい仕事です。得体の知れない、無性に事業をやりたいという気持ちが湧き起こり、気がついたらニューヨークのボスに退職を願っていたというわけです。今の仕事に携わってから、あつという間に10年以上経ちましたが、当時50億くらいだった事業をこの間で150億くらいまでに拡大しました。

いずれにしても世界と日本は密接な関係がありながら、世界と日本との関わりが大きく崩れてきてしまつて、日本総崩れ現象が言われています。スピードでは韓国に負け、コストでは中国に負け、システムとビジネスモデルではアメリカに負け、日本のとりえがないのではないか。冷戦構造の中で日本は西側の先進国を追っかけてくることで、何とかやってきて豊かになってきた社会。冷戦構造が壊れてしまい、全ての世界がフラットに、全ての国が平等にインターネットにアクセスでき、金融資本が享受できる時代になり、競争条件が全く変わってしまった。そのような中で右往左往しているというのが我々日本、特に最前線にいる、我々の世代だと感じています。

先ほど夏堀君の話の中で福島原発の話がありましたけれども、福島原発の後、やはりもうひとつ、大きな時代の変化が来ているという気がしています。市場、もの、消費など唯物論的世界観、現実目に見えるものこそ価値を見出す、家族、我々が支えている共同体、社会正義、善だとかが、もう一度に見直されてきている時代なのかなと強く感じます。

私は海外で日本人にとって一番重要なことを学びました。それは語学力でも何でもありません。日本人として日本をきちんと語れる力です。海外で日本のことをきちんと語れない日本人は真の国際人とは看做されませんし、文化の裏打ちがない人間は軽蔑の対象にすらなりません。問を発します。あなたは外国人に、日本の神を語れますか。日本人の思想、日本の神社仏閣、日本の伝統、日本の天皇制、日本を構成しているあらゆる本質的なものを、きちんと外国人に説明できますか？まがりなりにも世界で仕事をし、別の形で今も世界と関わりを持つ者として、そう確信しています。

こちらの写真は伊勢神宮。歌は西行のものです。

何事のおはしますかは知らねどもかたしけなきに涙こぼるる

現実には何も見えないものだけでも、ものとして感じるのではなくて気として感じる。そういった特別の感覚を日本人は持っています。日本人が持っている特別の感覚を何とか、世界に形を変えて表現していくことが、これから問われていく。新しい時代になったが故に、途上国が勃興し、このまま行ったら日本はだめになってしまうのではないかと皆思っているのだけれども、そんな事はない。日本は他の民族にはない、素晴らしい感性、感覚を持っているので、この目に見えない宝をうまく活用しながら新たな挑戦をすべきです。私も、海外の事業について、日本人としての感覚やこだわりを前面に打ち出してやっていきたいと思っています。

最近では学生が海外に行きたがらないと言われていていますけれども、日本を本当に理解するためには海外に行つて日本を見るということが、非常に大事です。是非、現役で素晴らしい大学に入学して、4年間の時間の中で1カ国でも多く海外に足を運んで欲しい、素晴らしい見識と教養を身につけて、素晴らしい人生を歩んで欲しいと思います。(ご清聴ありがとうございます)

#### ●質問

いろいろな国の人に出会ったと思いますが、日本人が一番感性が近いと感じた国は、どこの国の人ですか。

一番近いのは、やっぱり韓国かな。ただもう少し今の質問に答えるとすれば、私がまだ会っていないアフリカの人たちとか、自然と対話できるような独特の感性を持った人たち、私の知らない国の人で日本人に近い感性を持つ人たちがいるかも知れません。一番遠いのはユダヤ人、イスラエル人です。これは自然環境が影響しているのかなと思います。日本は森が豊かな国で、かの地は容赦のない岩石沙漠です。人間のものの考え方は風土に密接に絡んでいると思います。

あいざわ・よしひろ 元日本経済新聞米州編集総局記者(會澤高圧コンクリート株式会社代表取締役社長)

中央大学文学部卒後、日本経済新聞社に入社。東京編集局流通経済部、国際1部を経て1994年より米州編

集総局記者(ニューヨーク特派員)。国連記者クラブ(UNCA)に所属し、国連安全保障理事会を軸に国際政治を

取材。98年に退社し、2000年4月、株式会社ウップス設立。2008年10月より會澤高圧コンクリート株式

会社社長に就任。著書・「官僚」軋む巨大権力(共著)ほか。